

**<平成28年度学部附属共同研究報告> 学んだ英語を用いて、様々な場面で活用できる児童・生徒の育成
獲得した表現を使い、豊かな会話につなげる**

著者	アダチ 徹子, 東條 弘子, 齋藤 匡, 別府 百合亜, 山本 延久, 後藤 愛子, 坂口 瑞穂
雑誌名	宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要
巻	25
ページ	159-162
発行年	2017-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10458/5969

<平成28年度学部附属共同研究報告>

学んだ英語を用いて、様々な場面で活用できる児童・生徒の育成 ～獲得した表現を使い、豊かな会話につなげる～

アダチ徹子⁽¹⁾・東條弘子⁽²⁾・齋藤 匡⁽³⁾・別府百合亜⁽³⁾
山本延久⁽⁴⁾・後藤愛子⁽⁴⁾・坂口瑞穂⁽⁴⁾

I はじめに

外国語活動・外国語科部会では、以下のテーマで研究を進めてきた。

- 平成26年度：コミュニケーション能力を高める英語・外国語活動～伝え合いたい気持ちと伝える工夫を重視した授業～
- 平成27年度：学んだ英語を用いて、様々な場面で活用できる児童・生徒の育成～獲得した表現を使える表現につなげる～

これまで、人と言葉を使って関わる態度やコミュニケーション能力の育成を共通の目標とし、児童生徒に「伝え合いたい気持ち」をもたせ、発達段階に応じた「伝える工夫」を積極的に行わせることにより、5年間を通じてコミュニケーション能力を高めることをともに重視した授業実践をすることが小中連携した英語教育であるという共通理解を得ることができた。平成27年度には、「学んだ英語を用いて、様々な場面で活用できる児童・生徒の育成」というテーマで、学んだ英語の表現を単に知識をして蓄積するにとどまらず、積極的に使って人とコミュニケーションをとろうとする児童生徒の姿を目指して研究を行った。

今年度は、これまでの研究をさらに進めるべく、テーマを「学んだ英語を用いて、様々な場面で活用できる児童・生徒の育成～獲得した表現を使い、豊かな会話につなげる～」とした。相手のことを考え、学んだ表現を自分なりに使って伝えられるのは嬉しいことである。意見や気持ちのやりとりができれば、お互いから学んだり、相手との仲がより親密になったりすることもあり、さらに会話をすることが楽しくなると考える。そのためには、表現の意味や使用する文脈がわかりやすい導入、学んだ表現が活用できるレベルにまで高める練習の機会、目的や必然性のあるコミュニケーション活動の設定など、さまざまな授業改善が必要である。附属小・中それぞれで行った研究と実践の成果と課題について報告する。

II 附属小学校における研究

2.1 研究課題

今年度の附属小学校における外国語活動の研究テーマは、前年度に引き続き「切磋琢磨する子どもを育む外国語活動」である。平成27年度には、その前年度まで児童が積極的にコミュニケーションに取り組めるよう、使用する表現を精選して活動を行わせていたのを見直し、敢え

(1)宮崎大学大学院教育学研究科

(2)宮崎大学教育学部

(3)宮崎大学教育学部附属小学校

(4)宮崎大学教育学部附属中学校

てさまざまな表現を示したり、それまでに慣れ親しんだ表現を積極的に使うよう促したりした。その結果、英語力等の違いに関わらず、どの子どもも他者との会話に非常に積極的にはなったものの、コミュニケーション中に、黒板やプリントにある英文を見ながら話す姿も見られた。また、会話が成立したことへの喜びはあるものの、相互の思いを共有できた喜びを十分に味わっていない姿も見られた。以上のような実態から、28年度に解決を図る課題を以下の2つとした。

○コミュニケーション中に、黒板やプリントにある英文を見ながら話す姿が見られた。言葉に詰まったときこそ、目の前の相手とのやりとりによって何とかコミュニケーションの目的を成立させようとする子どもを育てたい。

○もっと、「他者のことを知ることができた心地よさ、自分のことを伝えることができた心地よさ」を味わせたい。

課題解決にせまることにより、英語等で会話をつなぎながら積極的にコミュニケーションを図ろうとする子ども（＝切磋琢磨する子ども）をめざすことにした。

2.2 研究の実際

授業改善を図る中で、英語等で会話をつなぎながら会話への積極性を高めるためのポイントを5つ見出すことができた。

①反応を示すための英語（I see. Pardon? One more time, please. OK. など）を5年生の4月から子どもに示し、使う経験をさせていく

昨年度までの2年間、「反応を示すための英語は子どもが必要だと感じ始めたときに示す」との考え方でやってきた。しかし、なかなか英語で反応を示すことに積極的になる姿を見ることができなかつたため、今年度からは、外国語活動のスタート時から反応を示す表現を提示し、相手に反応する経験を積ませていくことにした。

②単元最後のコミュニケーション活動では、黒板やプリントから英語の表記をできる限りなくす

英語に慣れ親しんでいない子どももいるため、なんらかの支援になればと英語表現をプリントや黒板にさりげなく書くこともあったが、困った場合こそ、目の前の相手と向き合って英語やジェスチャーを使って会話の目的を成立させようと努めてほしい。また、友だちと面と向かって話すのが恥ずかしい子どもにとって、黒板やプリントの英語表記は目をそらすための都合のよい材料となっていたのではないかと考えられる。せめて単元の最後の活動では、話し相手と向き合うことから気をそらさないよう、できるだけ英語表記をなくすことにした。

③繰り返し使える英語を精選しておき、他の単元におけるコミュニケーション活動に取り入れる

学習した表現は、繰り返し使ってさらに慣れ親しむことが望ましいが、単元が次に移ればまた新たな表現が導入され、忘れていくことになりがちである。以下の表現に精選し、いろいろな単元で繰り返し使って、子どもが自信をもって使えることをめざした。

- ・ Do you like～?
- ・ What～ do you like?
- ・ What do you want?
- ・ What color (shape) is it?
- ・ How many～?
- ・ 色・形・教科・食べ物・動物を表す英単語
- ・ クイズを出し合う際の表現（That's right /wrong. Almost. Hint (Answer), please.）

- ④単元をとおしたコミュニケーション活動の中で、英語や会話の流れに慣れさせていく
単元のゴールで行うコミュニケーション活動で使う英語の量は、前年度まで研究よりも増やした。そのため、増やした分の英語や会話の流れについても、単元のゴールのみではなく、単元をとおしたコミュニケーション活動の中で使う経験を積み重ねることが必要だと考え、単元構成を見直した。
- ⑤単元最後のコミュニケーション活動を「『英語で質問し答えてもらう』+a」の活動にする
これまでも「英語で伝え合うことができた」という経験により、コミュニケーションの楽しさや喜びを味わわせることに努めてきたが、本年度はさらに、単元最後のコミュニケーション活動において、何かの目的のために「英語で質問し答えてもらう活動」があったり、「英語で質問して答えてもらう活動」の先に互いの思いを詳しく伝え合う場面を設定したりすることで、「他者のことを知ったり、自分のことを伝えたりする心地よさ」を味わわせることができるようになった。

2.3 成果と課題

子どもが「いろいろな英語を使える」「選んで使える英語がある」と自覚し、自分の英語使用に自信をもつことができるようになった。また、互いの使う英語や言葉によらないコミュニケーションの手段への意識を高めることができた。

一方、黒板やプリントに英語表記を残したままコミュニケーションを行う際に、どのような子どもの姿が望ましいのか、他者理解についてどこまでをどのように求めていくのかなど、教科化への対応と合わせて再度検討し、整理していきたいと考える。

Ⅲ 附属中学校における研究

3.1 研究の実際

中学生は、学習したことをなかなか実際に使えないことが多い。この現状を改善すべく「学んだ英語を用いて、様々な場面で活用できる児童・生徒の育成～獲得した表現を使い、豊かな会話につなげる～」というテーマに取り組んだ。主として以下の3つの実践を行った。

①発達段階を意識した表現活動と場面設定や教材の工夫

各学年年間目標を定め、段階を踏んだゴールイメージを設定した。年間英語活動カリキュラム(シラバス)を作成し、教科書で学んだことを自分で工夫してoutputする機会をたくさんもてるようにした。1年生は学習したことをベースにして相手に伝える。2年生は自分の考えたこと・体験したことを相手に伝える。3年生は新たな表現を取り入れて、相手に伝える。実際の日常で使用する場面や英語で伝えてみたいという場面を設定し、少しずつ表現を増やしながら個人やグループでのパフォーマンスに取り組んだ。

②会話でふりかえる既習表現

授業の帯活動として教科書で学習した表現を使い、友だちとの会話を通してくり返し復習することで自分だけでなく、相手の良い点や間違いに気づくことができた。仲間との関わりから伝えるためのより良い方法に気づき、普段の会話で意識しながら練習することができるようになった。

また帯活動でくり返し復習した表現を含んだスピーキングテスト(ALTとの会話)を行い評価してもらうことで、自分の良かった所や苦手な所を知ることができ、スピーキングスキルを

ブラッシュアップしようとする生徒が増えてきた。

③ 伝える工夫を意識した目標の統一化・明確化とつながるCan-Do List

学年に応じた学習内容と資質・能力をふまえてCan-Do Listを作成し、各学年の目的・目標を意識させ、自分がどのくらいできるようになったのかを確認できるようにした。3年間を通して、表現のつながり、評価のつながりをもつことで生徒だけでなく、指導者も到達目標を意識して指導内容を確認することができた。

スピーキングテストやパフォーマンステストでは、ALTと話し合い、目標やポイントを毎回生徒たちに説明したことで、回数を重ねるうちに表情もよくなり、発音、声の大きさ、相手に伝えるときの様々な工夫が少しずつできるようになってきた。また、授業の帯活動での会話と同じように、友だちの発表を聞くことによって、生徒同士で伝える工夫に気づくことができてきた。

宮附3ステップ ~つながりのこだわり~

学年	Listening 聞くこと	Speaking 話すこと	Reading 読むこと	Writing 書くこと
1年生	Step1	学習したことに基づいて、自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。
	Step2	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。
	Step3	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。
2年生	Step1	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。
	Step2	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。
	Step3	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。
3年生	Step1	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。
	Step2	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。
	Step3	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。	自分の好きな言葉や表現を伝えることができる。

宮附3ステップは「つながる美徳」へのこだわり、英語の「つながってほしいのつながりにくい」場面を克服するために設計されています。

3.2 成果

それぞれの実践においては狙った成果を上げることができた。また、年間を通して生徒たち自身が自分のスキルがあがっていると実感できるような場面を少しずつつくることができた。実際に伝える必然性がある場面を設定して、友だちと話して英語で活動することで英語への興味関心や英語を使おうとする態度はとても素晴らしい。自分がどのくらいできるようになったのかを確認できるよう年間英語活動カリキュラムやCan-Do Listを提示したことで、生徒たちは持続したモチベーションで懸命に活動に取り組む姿が見られた。

3.3 課題

授業の大半が口頭での英語活動となっており、ライティングのスキルが定着していない。計画的にスモールステップを重ね、生徒が実際に英語で書いてみたくなるような場面を設定していく必要がある。人だけでなく、いろんな関わりから英語を使って表現できるような場面・取組を広げていく必要がある（英語で学んだことが他の教科でも活用できる。または他の教科を英語で伝えることができるなど）。さらに文脈に密着した機会の設定を模索していきたい。